

●高澤良一 第八句集 随笑

●七月―九月

夕立に赤蟻川止め喰らひけり

風俗文選  
「豆腐ノ辯」読み漁りゐて昼寝かな

団扇手にとりてぬるめの風起こす

夕焼けに顔を燃やして発句修羅

ピーマンのやうにむくれて距離置く妻

冷し酒世迷い言など申すなよ

手も脚も腹も化粧ふて女郎蜘蛛

栄螺わたの腸良薬にして弾む酒

濃く淡く蟻の影曳く百度石

端居して孫の手をもう借りる齡

端居しておもひ巡らす眼となれり

蚊帳潜り出でしところで覚む昼寝

相方の寝相や団扇持ちしまゝ

祭の喧嘩男は似たりよつたりで

箱根路の何だ坂こんな坂竹煮草

岩たばこ宿創業は明治なり

灯を取りに箱根の山の兜虫

ごろ寐の夏又来て厄介かけまする

行き過ぎの一つや二つ蠅打てる

死ぬ程の暑さ人能く生かしけり

布袋草程の明るき世を欲れり

松葉牡丹咲かす家などんと失せ

荒雫梅雨ならではの泰山木

椎の花やたら妄想搔き立てに

嵌め物の類ひあれこれ夏座敷

夏座敷楓の風を取り込みて

冷索麺見た目も味の内也と

鰻喰うて間延びした顔店を出づ

皮剥の小さき鱗振る鎖夏法  
莫迦戦争諸が主食の座につきて  
杏の核真つ赤に蟻の総掛かり  
初老とは木陰に涼むやうなもの  
日を追うて旺んなる夏如何にせん  
とぼけたる貌のうまづらはぎの旬  
草河豚のどうにかこうにか喰へる奴  
クーラーのああ埃臭さ試運転  
たいがひにせよとまくなぎ打ち払ふ  
茄子漬時が薬と養生す  
板塀に蠅虎の岡っ引  
父の日の昼寝セットのプレゼント  
洗濯物家に暑さを取り込めり  
ヤップより届き主治医の夏見舞  
巴里祭定番鳩の手品かな  
病院は緑陰ナースは白き風  
快眠を心がけ夏へこたれず  
せつかちと思はるもよし団扇風  
温床を蹴って泥鰌の浮き上がる  
浮かぬ顔姉の金魚と見比べて  
虎魚産み落とせし親もこんな貌  
大金のごと磯鮑押しいただく  
沢蟹のカタンと転けて宇津谷道  
盗み歩きする蟹数多ゐて面白  
かなぶんの支離滅裂となり当る  
ごきぶりを見とがめし妻さあ大変  
ごきぶりを前にわくわくする一打  
徒に大きなエンジェルランプ  
ペット  
すずめ蜂患部のごとき巣を作り  
嘶家の扇のごとく器用なり

皮剥の革財布などあらまほし  
冬瓜の老人食を出されけり  
ただ甘き玉蜀黍を蔑めり  
素裸を朝からたのしむ誕生日  
一枚東北道の巨きな青田みちのくは  
福島の桃の夕焼けどき長き  
いっぽんの合歓咲く彼方古戦場  
古戦場ここら一帯青すすき  
烏賊下北路釣りの漁火鬼の目ん玉大  
海峡のこちらは内地宵待草  
草刈つて海峡に向く一祠  
青森檜葉半島の背をなしにけり  
鉞半島突端の大待宵草  
烏賊と海胆さざゑちりばむ半島絵図  
お国自慢などしてバスは青嶺越え  
バスの旅盛夏の下北くんだりまで  
夏大間崎の露昆布干し場の留石に  
海峡の舟虫にして黒光り  
下北の一夜干し烏賊星の下  
硝子の泛子ごろり夏場の大間崎  
甘草仏ヶ浦を燭と見立てて仏具岩  
佐井人の海胆突棒の甲斐甲斐し  
海照りて鬼の手作り岩を灼く  
老鶯恐山も下北訛恐山  
牛頭馬頭の徘徊暑し恐山  
霊場巡り水母のやうな出で立ちに  
羅の仏下ろしに畏まる  
恐山日傘抹香臭くなり  
石灼けて粉塵に帰す恐山  
恐山黄泉の下見にあらねども

恐山盛夏団体割引あり  
獅子独活の藪から棒に恐山  
恐山巡りの白靴憂々と  
淋代三陸路の浜のやませに身をすくめ  
襲ひ来るやませに立往生の松  
ぼんやりと夏霧のこる山間部  
赤松の美林にやませ忍び足  
バスの旅俱にし岩手県の蠅  
栗の咲くここまで三陸大津波  
この村の津波避難路栗の花  
旅北山崎をして陸中海岸海鞘どころ  
釣竿陸中 龍泉洞を青嶺に向けて川漁師  
川ぐいと曲る青嶺を引き寄せて  
釣人の居る瀬居らぬ瀬青山中  
ようこそと宿の燕がとんぼ切る  
峡燕群れていちにち暮れにけり  
悠々と暮れて青嶺のいま黒嶺  
燕の糞掃きて湯宿の番頭さん  
旅の衆朝が来たよと峡燕  
ドライブイン四方の青嶺に見下ろされ  
旅疲れ夏川に眼を落としゐて  
溪流浄土ヶ浜に土用鰻を活かしをり  
やませの魔手蠟燭岩に伸びにけり  
遊覧船やませの底を這ひ廻り  
海中に落ちて広がる海猫の糞  
浄土ヶ浜蟹の称ふるお念仏  
アイスクリームこんもり小岩井農場製  
しつちやかめつちやか団体客のわんこ蕎麦  
やっと出て岩手時間のどぜう鍋  
芋麻ちよま知らず東海道の一筋も

斑猫は肉食の彩泛べけり  
蕪村また大器晩成種ふくべ  
武具馬具と昼寝覚めたる人の言  
あそこからかう来るかぜと端居人  
芋殻焚きなど大切にしませうや  
夜をうとうと暑さに馴れるまでのこと  
のうぜんの焚き付けられてゐるごとし  
この大暑逃れんための一ねむり  
大昼寝して沙悟浄の国にかな  
すててこのすっぽんぽんは佳かりけり  
蟻殺めばそこに駆け寄る蟻一つ  
スタイルは細魚に優る水着かな  
青簾吊るや寝てよし覚めてよし  
蟻たちの固持して原始共産制  
気圧されてぐうの音も出ぬ大暑かな  
暑さめと己に言葉ぶつけけり  
仕きたりの花鳥の絵柄岐阜提灯  
家にごろごろ暑さの持つて行き場なし  
ふて寝して暑さの通り過ぐを待つ  
降りて来て二階の暑さ嘆きけり  
鼻の利く蟻ゐて干菓子探り当つ  
蜂飛来即眼圧といふ言葉  
すててこで出てゆき速達受け取りぬ  
男っぷり上げて戻れり片陰道  
旺んなり朝の峯雲も食欲も  
朝の蟬うんざりする日が始まりぬ  
肌合ひのよきを好みてすててこ党  
階段の壁が遊び場守宮の子  
やあ守宮お主ところで何代目  
毛髪の間ほろっと汗生まれ

団扇置き昼餉に呼ばれゆきにけり  
シャワー浴び吾が前よぎるアフロディテ  
泡沫のなほ立ち昇る昼寢覚  
しげしげと鏡の眉の茂りかな  
投函に出でて蹤き来る夏の月  
緑陰に莫迦げて大き忠魂碑  
掛けたる肌着の釦貝の涼  
心棒に狂ひを生ず真炎天  
何處へでも首を突っ込む蟻の性  
向日葵は海を見据えぬ巨匠の瞳  
噴水の整ひ過ぎてよそよそし  
綿飴にぶつかりさうになる夜宮  
シンコペーション真夏夜刻むジャズののり  
昼餉のあとごろり鰻にでもなるか  
にんげんに祭り雀に真炎天  
大櫓戦ぐ神社に涼みに来  
自墮落と譏られやうがまた昼寢  
目をぎゅつとつむって開いて炎天へ  
夏帽子妻の云う被れというに首を振る  
通院の炎天の道ゆく他なし  
先生に日焼顔見す診察日  
診察のそばかす裸裏返す  
診察は束の間炎天また戻る  
暑にめげぬための麦湯を沸かしおく  
腸の水の山彦昼寢覚  
ぱたと落つところを見れば豆かなぶん  
冷房を入れず自然の風待ち派  
風鈴の少し慌てゝ鳴りにけり  
何しても中途半端に軒風鈴  
蝉ごゑのあの啼き方は手捕られし

ごきぶりをどうしてくれやう丑満刻

花火尺玉横須賀花火大会東京湾を凹まする

シンシナテイキッド連発花火かな

花火の煙ゆらゆらかつおのゑぼしめく

揚花火連打ドンプスドンプスと

ピザ店の大扇風機頭上より

炎ピザ職人ゆる日をピツツアヨーラの海鮮ピザ

ビーチバレーの日焼けピチピチガールかな

雀の他みんな暑さにやられけり

この暑さどうかしているペンキ塗り

ペンキ塗る青空がまだ灼けぬうち

南瓜煮る妻に俳句の出来栄え問ふ

まだ鳴かずどうしたとか油蝉

煮えきらぬ風鈴の音とつぶやけり

頭かぶり振りけふの暑さを諾へる

莫迦げたる暑さに馴るる他なかり

ピカザザと天地俄にさうざうし

雷果てて現にかへる顔と顔

飲小山梧雨兄み仲間直腸断てりと夏見舞

そこらぢゆうとり散らかして蝉音の中

ここに来て炎暑一掃通り雨

玉突きの玉めく台風天気図に

朝刊をさてと開きて丸裸

芙蓉萎え申しそびれしやうな形なり

わめき散らす蝉あり我に鼓膜あり

朝蝉せんの誦経の尻切れとんぼかな

百蝉せんの息ひそめけり朝の杜

寝物語などして暑さ一頓挫

なほ猛威ふるふ暑さにはだけ寝る

目が覚めて此処如何な國蝉しぐれ

啼き納め方にも作法法師蟬

煙る花畳み込みけり烏瓜

とうぐわんを食みし其の夜の大寝言

青ぶだう日毎に凌ぎやすくなる

山巔霧ヶ峰・車山高原に立ち老鶯の気分なり

先生が引率ニツコウキスゲの径

いっぽんの手拭首に花野行

グライダー大格納庫霧閉ざす

吾亦紅霧の冥さを帯びつゝあり

どうどうといなし花野を巡る馬

一条の霧を抜ける日の光

覗き込む下山路霧を背にしたり

霧を来て鮫肌いろの両腕

石ころ径霧に眼の利く蜻蛉来て

吾亦紅独りごころを通す黝

吊鐘人參羽虫においでおいでせり

ししうどの花を霧来て閉ざすところ

老鶯のさうともさうとも珠のこゑ

思い立つままに旅して来て夏野

霧らふ山下り来てホットミルクかな

ごきぶりのどうでもよきが髭を振る

冷麦茶ありて重宝しておりぬ

なまる身をしゃんと正せる冷麦茶

冷麦茶葉の如く頂ける

ありふれてゐる定年と白粉花

かまつかの紅蓮を見栄とおもふ日も

ごによごによと云ひて夜蟬の紋切型

晩蟬のこゑ押つ被せ押つ被せ

ほれほれと土用雀を翔たせゆく

シヤ齡相志ワー浴ぶといふより滴らす



芋殻焚く新聞紙は吾が持ち  
落蟬のころりと参る姿かな  
思ふともけふを限りの蟬ごゑと  
さるすべり咲きつゝ散れる空まさを  
土壇場の蟬の声音こわねと思ひけり  
浮袋並べ干しある月の庭  
墓地越へて二夕夜続きの踊唄  
劍客シラノさながら夜蟬の呖くは  
通り雨長らふ蟬に落蟬に  
よい匂ひして来ぬ土用の焼にぎり  
とんとんと砂糖スティックアイステイー  
軽装がベスト炎天あるく旅  
乗り合はす夏の嘗ての通勤車  
ぎしぎし水戸 酒沼 那珂湊の枯れざま海は荒れ模様  
盆波の生めるあぶくのたゆたへる  
民宿の裏手のへくそかづらかな  
いちめんの稲穂明りに目の馴るる  
退院のその後を聞けり芙蓉の辺  
象亀のやうなテントもキャンプ場  
逆光の鯿の間髪入れず跳ぶ  
三人が三人扇子取り出せり  
扇子もつひとは扇子を遣り木蔭  
蜺は朝鰻は午後と漁仕分け  
時化するぞと牢名主めく舟虫が  
藪蚊打つ自ところゑも添ひにけり  
天牛の背を一息に押え込む  
秋草といひて一草引いて来ぬ  
はたたた神ダイダラ坊を起すなよ  
梟ピカッ展(陶板)好きピカソの遊びごころの壺  
訓示垂る大向日葵と思ひけり

魯山人旧居

あさがおに夏も了りの尿の音

秋風笠間稲荷のそろと笠間の石狐

目の馴れてふうせんかづらの在りどころ

店先に水打つ鰐の洋服屋

さうかさうかお盆休か散髪屋

迎火焚く横を挨拶して通る

新宿の地価折り込みの氷水

日盛りの老人割引利く映画

風の来る方を開けおき芋殻焚

青空がまるごと灼けて玉砕日

涼まんと帆船模型置く茶房

炎天をマリオネットのごと歩し来

ハンカチをベルトに挟む齡でなし

去年は一寸降られし芋殻焚

落蝉のごとく仰向きぐうたら寝

被るのがめんだうなだけ夏帽子

蝉わっと鳴き出す前にしておくこと

蛸や椅子の片脚浮いてをり

散水の葉蘭打つにやぼたぼたと

梨貰ひ大きい方をののさんへ

梨を剥く皮のぶらぶら定年後

作務衣の紐三つ目結うて炎天へ

畏くも玉音放送花かぼちゃ

肉声高校野球に肉声ぶつけ油蝉

炎天高校野球にもってゆかれし大飛球

ピッチング入道雲の高さより

割れ鐘の蝉の独壇場に入る

颱風は颱風として葉嚙む

向日葵の王道青すすきの霸道

あらあらしく落ちて来るなり葛の雨

颱風の出方を待てる外房線  
風来坊颱風こつちへ向つて来  
颱風やうち倒さるゝ樹が凶器  
颱風の腕力のほど身にしみて  
生木剥ぐ風の鈍刀颱風裡  
颱風来て玄関にわか物置場  
颱風の合間蚤勇ふるふ蟬  
颱風のあとのなんだいこのあつさ  
少しづゝガタのくる家颱風裡  
颱風一過パンパパーンと晴れわたり  
蠅叩遺品のごとく扱へる  
胡瓜揉みぽりぽりやりて昼餉了ふ  
梨といふ天然ものの水の味  
ひ「中原道夫俳句日記」惠送受くようたんから俳諧を出す粹なひと  
褒貶はふうせんかづらのあなたなる  
こゑも褪せ茶の出がらしのやうな蟬  
机に稿に羽蟻の落下傘部隊  
灯を取りにきたぞと網戸の外の蟬  
原稿に降りし羽蟻に迫る指  
押べっべ圧せとわが連れ合いは蟻嫌ひ  
灰皿に灰横たはる終戦日  
夜半の虫煙草ふかしに起きて来ぬ  
夏瘦て花王石鹼また逃す  
蚊に喰はる妻が夜中にむずと起き  
不受蟬の法華經三十一句不施と日蓮坊を慕ふ蟬  
忍辱にんにくの鎧に蟬の啼き通す  
顛倒良医の喩せる蟬の太つちよ一凡夫  
方便の一つに蟬の小便も  
ご法話に蟬随喜して靈鷲山  
啼き了りへし蟬のころりと仏国土

けふも又蟬の頭陀行椳の木に  
法師品ほつしほん称えて蟬の生まる也  
世尊に掌合はせるごとく芙蓉閉ず  
大施主のこゑを代弁油蟬  
森深く蟬八百の眼げん瞠きて  
往生の手形に写経法師蟬  
息つけり蓮華数顆のかほる中  
選三乗ぶなら椳の木食頭陀行派  
羽化の蟬地涌じゆの菩薩の化身にて  
身は空に放ちて蟬の糞ふん掃衣ぞうえ  
定年は如何にと蟬の頭陀行者  
法師蟬多宝如来のこゑ以て  
忍辱の心の裡を法師蟬  
成仏を明日に蟬の富ふる楼那なの弁  
蟬音断ち靱彦の釈迦説法図  
銀砂子撒ける蓮池れんちのいと涼し  
芙蓉咲き生・老・病・死持ち回り  
蟬は木に登る六根清浄と  
喚く蟬二百億劫こく経て成佛  
虚空会えの説法蟬のこゑ借りて  
念力をキリキリ蟬の大神だいじん通ずう  
蝸かに三十四身变化佛  
竜口寺蟬音の念ねん彼び観音力  
昼寢覚六牙の白象降り佇ちて  
蟬は今普賢の行説く大団円  
ラロシアパウルへ南二万下勇魚のシャリアピン  
甲板にて星座教室天の川  
船の旅プールではしゃぎ夜はダンス  
ガヴァジューストラック島の片陰選り  
椰子の間百葉箱のやうな家

タロ芋のとてつもなきを掘る島人  
腸妻の云へるの為よろしき牛蒡召し上がれ  
蓑虫の蓑はおほかた簡単着  
踊巧者踊見巧者風の盆  
山芋の播粉木に鉢踊り出す  
けだるさが目に見えて退き初嵐  
珊瑚樹の実や百日をうち過ぎて  
灸花今はかうして日を送る  
葉鶏頭勢いづいて来たりけり  
処暑処暑と今朝方の蝉さう鳴くも  
首都圏ニュース稲の作柄稍良と  
夕飯の支度そろそろ蝉音減る  
どかどんと犬へこまする大花火  
フィナーレのいけいけいけどんどん花火かな  
紫薇花下に極楽おもへとや  
蝉ごゑのヒリつく中を投函に  
単純で明快が佳し花芙蓉  
こおろぎが畳のうへに上がり込む  
晩蝉の明けても暮れてもこの一手  
昏倒の蝉を箒に懸けにけり  
珊瑚樹の赤貧洗ふがごとき実よ  
健気にも蝉が櫂に取り付く凶  
鬼やんま飛行高度を上げにけり  
達者なる足腰秋のあめんぼう  
それならと紅葉の頃の宿をとり  
かまつかのてんでこ舞の風の日よ  
蝉の瑠璃ちらつと脳裏掠めけり  
新諸を水に濯げば紅はしる  
棧橋の先に鯢跳ぶ弁天屋  
鴨群るゝは寄合に似て池の央

鯊釣の装備の一つ烏龍茶  
まんじゆさげ此処を黄泉路と違へ咲く  
懐古  
玄関にて鳴くこほろぎの居候  
金澤山きんたくさん弥勒院跡まんじゆさげ  
大犬蓼この雨何時か上がるだろう  
お隣の芙蓉が咲いてホツとする  
虫の鳴く左あてらさわ沢線トコトンと  
羽前山辺羽前かねさわ金沢稲刈りどき  
途方もなき稲穂の寄する小学校  
見渡して芋煮の鍋の据えどころ  
羽前長崎  
芋煮鍋そら噴く芋をさあさらえ  
鍋蓋におたまの鎮座芋煮会  
芋煮会差し入れありぬ香の物  
芋煮会蠅も仲間に入りたがる  
ぎしぎしの錆びを塩し辛蜻蛉おから貰ひ受け  
真ん中をへことやられて風倒田  
陸羽西線  
稔田に交りて稗のまんめんじん  
稲雀飛来選り取りみどりの田  
蕎麦の花はや戻りてよそよそし  
鈍行の中まで稲田の照り返し  
刈草古口を抱へて投ず最上川  
最上川舟下り  
八目鰻捕る川の向かうの頑固爺  
秋風にだば発ちますと舟下り  
露どきの魚の眠りに棹さして  
船頭の地下足袋さやに舟下り  
最上川あきつの止まる破れ竹瓮  
もくもくと藻屑蟹漁濁り川  
最上峡秋天を抜く土湯杉  
最上川みよし舳へどんと秋の風  
コスモスの風にのんのん舟着場

秋雷の一つ転がる山向う  
稲つるみ全幅を見ず最上川  
旅先の藻屑蟹めく目覚めとも  
秋霖について朝より八目鰻やっめ魚  
屋の虫電車はなんぼ待てば来る  
かやつり草翁も泊てし川港  
最上川いつも揺れゐるすすきの天  
本合海渡しの向う稲の海  
秋の風最上川面を吹き広げ  
秋燕濁りやまざる最上川  
花すすき雲を飛ばして最上川  
秋蛇に遭ひし女の気色ばむ  
秋の日にぬくむ渡しのごろた石  
花すすき河の流れのやうにかな  
糸瓜忌子規庵への鶯谷で落ち合ひぬ  
風冷えて蕎麦うまき日の上根岸  
秋晴れの日の子規庵のガラガラ戸  
子規庵のつましき間取り昼の虫  
子規庵の屋根這ふへちま蔓八方  
子規庵の素通しガラス戸冷まじや  
子規庵の戸袋の反り蠅虎  
ひやつく日笠森おせんに逢ひそな辻  
子規庵の見取り図秋も深まるに  
子規居士の体温計とやいと露けし  
居士臥せぬし居間より露けきものはなし  
子規庵の糸瓜こづきて立去らむ  
瀬祭忌天氣どんどん悪くなる  
糸瓜忌の傘立に傘十四五本  
秋風寛永寺が当りて上野戦争碑  
蓮葉不忍池をめぐりにかかる池の風

煽られて蓮の棒茎ごつつんこ

蓮葉の大き葉を揺り大き風

霧籠草津めの朝は一際硫黄の香

いち早く湯川水草黄葉せり

小鳥来る髯のベルツのその頭上

胸を張るスクリバ石像黄葉冷え

しびれてはうめく草津の夜長の湯

やや寒の朝湯文人気分かな

露天湯に靈芝れいしのごとき老いの尻

川床に湯花川原にすすき咲く

湯花咲く湯川のうへの秋の空

青どんぐり湯川高鳴り流れけり

湯畑草津の秋やとてつもなき湯量

霧まみれ婆ちゃん湯の花ひさぎをり

碑明治十一年にその名露けきベルツ花昭和十年 草津訪問

うそ寒の湯揉み赤帯赤湯文字

連れ立ちて湯畑巡る夜長人

霧らふ宿ぎうと犇めく草津町

霜草津町の日の朝湯共同湯うめてもうめてもや

朝露に触るゝ足許湯中り呆け

箒・塵取・秋寂ぶ板の間共同湯

節黒の杉板囲ひ夜長の湯

もうもうと湯気立て蒸籠の朝ばたらき

蛾の骸窓の辺りに共同湯

夕霧にチヨイナチヨイナの時報かな

地蔵湯の道順聞いて夜長人

長き夜の熱きが薬地藏の湯

草津夜寒こんな湯加減殺生な

草津朝寒我慢比べの湯となりぬ

浴衣着て妻も飛び入り湯揉みシヨウ



草津うそ寒とんだ熱さの掛湯浴ぶ  
やせ我慢して入る夜寒のぐらぐら湯  
湯花咲く夜長の宿の湯引き樋  
まんじゆうの湯気の淡さに町霧らふ  
光泉寺  
櫻落葉軽く肩打つ化石句碑  
湯けむりにふすぼりもせぬ月の貌一茶  
霧籠めに一茶の句碑のふすぼり貌  
文字面の「草津道の記」露けしや  
句碑の横風にばらけし芒の穂  
霧に殺生河原呼びかく殺生河原の拡声器  
霧に擦るマツチのぼうと硫黄の香  
一本の樺見ゆ他は一切霧  
秋風白根山の吹き渡るなり酸性湖  
火山弾上にぬくもる秋の蠅  
監視員詰所の前の濃りらんど  
恨めしや湯釜は霧に覆はれて  
糸瓜忌の癩癩玉が破裂せり  
秋風に安住敦の渋い顔  
ちまちまとよく抓みしよぶだうの皮  
進みあるくわりんの尻の虫腐れ  
芙蓉咲くこともふとしたことのうち  
さふらんや一ト日は些事の積み重ね  
ブラウンシチュウ灯と火恋しき頃となり  
それとなく秋は来にけりポタアジュに  
コスモスの空へ風船離せし子  
あきらめがつきコスモスの吹かれざま  
運動会近しよブラス風に乗  
いとこどりして立つ句評ふかし諸  
栗硬きは茹で足らざるや出来悪しや  
またも来て猫の寝そべる干し布団  
螻蛄の一劍客に出会ひたる

蝻螂の構えはト伝無手勝流  
蝻螂の一棒切れと渡り合ふ  
蝻螂と戦争一つ日の下に  
蝻螂も戦もキツと身構へて  
先づ出方窺ふ戦も蝻螂も  
秋風も戦もひよいと起こるもの  
ゑのころはうぶで真青で澄みきるそら  
餌付きの金魚貰へり義弟より  
水も入れ替へて金魚の新居の秋  
鴨がやがや云うて蓮葉枯らすなり  
おのが香に木犀我を忘れたり  
降り出して木犀我に返りけり  
木犀の家木犀の家隣  
くわりんの実蟻の門渡りなかりけり  
バツタ跳んで横浜未来都市のうへ  
和服の胸張りていそいそ菊日和  
箱根越え胸毛の馬子凶広重忌  
留女の藤沢宿凶広重忌  
鶏頭の駈けだしさうな若冲忌  
買物の帰りに見て来し月のこと  
あり余るもの木犀の香と時間  
柿冷ゆるそんな季節となつてをり  
ほたほたの柿に手を焼く啜っちゃえ  
柿ほったほたなれば包丁役立たず  
どうしてもそこへ眼のゆく柿の蒂  
颱風のいい加減さに振り回され  
晩年の既に始まる揚げ零余子  
軽雷の飛び入りもあり雨名月  
雨止めば確かめに出て今日の月  
漂鳥といふのだそうだその掠鳥も

稻雀何處か窃盗団に似て